辰巳会会員便り

阿部　孫治

皆様益益、御清祥のこととお慶び申し上げます。たつみ誌有難く拝受致しました。

故大幡久一様の遺影と関連記事も多く、殊に私は帝人入社以来、六十年近く御指導と御厚情を頂きましたので、一入感銘をうけました。

磯長　武雄

五月二十二日の、御寺泉涌寺での第二十七回全国大会も、百人もの出席者を迎えて、いとも盛大に、諸事滞りなく行われて諸兄姉も御満足なされたことと、大慶に存じます。

幹事の皆様のお骨折りを深謝致します。

私は色々の都合で、昨年、一昨年と二年続いて桜友会に欠席致し、自然貴会へも今年初めて出席しましたが、企画の美事さ、そして泉涌寺に就ては、このような高貴なお寺様があったのかと、初めて知り、驚きとともに、拝観の機会を与えられたことを、この上なく有難く存じた事でした。

又この度、『辰巳会』の会名のよって来る処も初めて知ることが出来ました。

即ち、鈴木商店が、岩治郎様（一八三七～一八九四）が、大阪の米穀問屋、辰巳屋の番頭をして居られた当時、その神戸の出店を譲りうけられて、明治三年に創立したものとのこと。よつて以づて、往時を偲び、その名を永久に存するため『辰巳会』と名付けられたものと納得いたしました次第。

鈴木商店が、世界に覇を競っていた時代には、その直系、傍系の会社は、日本商業、神戸製鋼所、帝国人絹、帝国麦酒、帝国汽船、等々で、60社以上に及んだこと。そのなかには、今日尚盛業中の会社も多々あることと存じます。さすれば『鈴木商店健在なり』で、辰巳会の前途も洋々たりと信じて疑いません。また、そうであることをこい願ってやみません。

皆様のご自愛を切にお祈り申して擱筆いたします。

井上　函二

一雨ごとに暖さが増して参りました。

たつみ誌四四号有難う存じました。

私も九五才となりました。皆様の益々の御発展を心からお祈り申し上げます。

宇佐美　篤

たつみ誌拝読させていただきました。

幹事長、大幡久一氏の御訃音等、承り深く衰悼の思いにとざされ、諸兄の黄泉への御旅立ちに心よりの、御瞑福を祈り申し上げました。

永遠の左様奈良を叫びました。そして各各それぞれの人生を、歩まれねばならぬ人間の起伏哀楽の運命を沈思瞑目するのみです。

大柳　ツル

たつみ誌を有難う存じました。

曽ては主人が楽しんで拝見させていただいて居りました御誌を、つづいてお届け頂き有難くなつかしく拝見させていただいて居ります。私も共に出席させて頂きました、比叡山、白沙村荘、大河内山荘、今もなつかしく想い出されて参ります。

柳田様何卒一入御大切に、会のため、是非是非、お元気でお世話いただけますようお祈り申し上げます。

大幡ミドリ

漸く春色濃やかになりました。過日はご多用の中をお揃い御来宅、仏前に身に余る感謝の楯を頂戴いたし故人（久一）もさぞかし歓んで居ることと存じます。

篤くお礼申上ます。

此度は亦たつみ四十四号を多数お贈り頂きお気配りの程忝く各自座右に追憶になぐさめとして保存、皆様方のご厚意をながく残し度いと存じて居ります。末筆失礼ながら会長様はじめ小倉様、五十嵐様へもよろしくお伝え下さいますようお願い申上ます。

時節柄一層御自愛下さる様お祈申上お礼まで。

岡田　静子

ようやく春らしくなって参りました。

「たつみ」第四十四号拝受いたしました。

岡田猪太郎、生前は一方ならぬお世話様になり有りがたく御礼申上げます。主人は「たつみ」をいつも楽しみに待って居りました。「たつみ」の美しい表紙が好きでずっと残して居ります。

机上には鈴木よね刀自のお写真をいつも飾り、金子直吉様に、幼少の頃よりお心にかけて頂いた事をよく話しました。下関の頃、本店の頃、鈴木薄荷の頃の事など、折りにふれなつかしそうに話して呉れました。ほがらかに洋蘭作りを楽しみに過して居りました。この度、物故者名簿に名をつらねる事となり淋しくなりました。昭和五十九年五月十七日京都枳穀邸へ皆様と御一緒させて頂いたのが、最後の旅行となりました。急性心不全で全くはかない最後でした。（六〇、一一、一七死去）

木々の芽がふくらみ、庭の白梅、薄紅梅、しだれ梅も散り始めました。水仙はまだ咲いて居ります。春が来るのをどんなに楽しみにしていた事でしょう。

鈴木よね刀自のお写真はずっと飾っております。皆々様にお親しくして頂いた事を私は只々感謝して居ります。

ありがとうございました。

合　掌

北野　浅美

去る五月二二日京都東山、御寺泉涌寺に於て行わる。場所は名高き東山三十六峰の一嶺、月輪山麓白砂青松の一劃にあり長い参道を経て競う大伽藍、堂宇、新緑に覆われ、数々の御宝物のご案内を頂く誠に眼を奪うものあり。正に辰巳会全国大会に格好の場でありました。全国より集う人々九十六名天候不順の折柄にも幸い好天に恵まれて一堂に会しそれぞれ久闊を叙し合い、大会も談笑裡に予定通り進み最後に会の繁栄を祈り恙なく閉会、お互いの健康と来年の再開を期して袂を別つ。筆者も元気な限り毎年楽しんで参加させて頂くことにしています。末筆ながら幹事皆様の御苦労に対し深甚の謝意を表します。どうかお元気に来年もよろしくお願い申上げます。

敬具

具嶋みさほ

おなつかしきお誌、有難う存じました。

皆様のご近況を、亡き主人の霊前にお供え致しました。さぞかしよろこんでいる事と存じ厚く御礼申し上げます。

島　京子

先般は新年の集いにご招待頂き、ありがとう存じました。いろいろたくさん感ずるところあり、今后に生かしたいと思いました。

鈴木社長様にお目にかかれましたのも幸いでした。『よね女史の精神が、どうしても生きている』と感嘆した次第。

またこのほどは、『たつみ』誌44号送って下され、写真も頂き感謝のほかなりません。高畑千代子様はやはり美しい（心ばえも）方と思います。

辰巳会ご一同様のご健康を心から祈っています。（『黎明の女たち』の編者）

中山　小藤

花の時節と成りました。如何御過ですか御伺い申します。一別以来御目にかゝりません。いつも御懐かしく思って居ります。昨日新しい会報を見ましておすこやかに御過しのほど御喜び申し上げます。実は倅が以外に早く亡くなりまして、只今は嫁と二人で淋しく暮らして居ります。

只今は、護国神社のすぐ東側に六甲マンションの二軒目隣に居ります。御多用でしょうが、万一、御通りがかりでも有りましたら、御立寄り下さいませ。会報を見て余りのなつかしさに、悪筆ながら、一寸、筆を取りまして、お伺い申ました。乱筆乍右まで。

私は、先年足を痛め座しきだけは、ゴト〳〵歩いて居りますが、庭には一切おりません。目は、どうやら見えます。庭を見たりテレビを見たりして、一日中過ごしております。小鳥がたくさん来ますので、なぐさめられます。年は、九十六才に成りました。惜しくもない命を、永らえ、困り乍ら感謝しております。

会報をいつも送っていたゞき、

有りがたくかんしゃ致しております。先は、右まで申上げました。

故久米治の妻小藤です。

松下様、御忘れになられたかもわかりませんネ。

今日もまたよしなにくれし
一日を思うわが身の幸福を
よろこぶ九十と六つの坂を
ぶじ越してやがて峠
も近くなるらん　　小藤

松井タケヨ

御たつみ誌、第44号を只今三月二十七日午后三時半、拝受致し、厚く御礼申し上げます。

今日は晴天で、東京支部春の例会で『川越の、いも懐石を賞味して、町を見て歩こう』の日で、御出席の皆々様、御楽しみの御事とお慶び申し上げております。私は昨秋の例会と、今年新年会も楽しみにしておりましたのに、お寒かったので、身を案じて欠席致しました。いつもの会にも出席して皆々様に、お目もじすると、亡夫元の生前を思い御なつかしく存じているのに、残念でございました。私は身体丈夫で、衣食住『ベッショタイ』故、家と屋敷は広くても、孫夫婦、曽孫達とは別居して居りますが、長男65才、秀子60才とは三人同居で、休日には曽孫達必ず遊びにまいり、にぎやかに楽しい老後を感謝し乍ら時々は、留守番役も引受け、『若い人とおなじで嬉しい耳と声』の通り大丈夫頑張っています。

歩くのが早くないのと、自動車があぶないので、外出はあまり致しません。今年になって、代々木の寺へ墓参と、銀行、健康検査、一寸した買物等々、七度しか外出して居りません。

曽孫も七名になりました。若い時、松井家で辛抱した事が大変幸福につながりました。

松村　勲

先月の大会の節は、いろいろお世話になりました。有難く厚く御礼申し上げます。

御寺泉涌寺は、勿論初めての処で、そのいわれをきき、その堂塔の偉容を拝見して深く深く感銘を受けました。又食事は京都独特の精進料理を頂き、心深く賞味させて頂きました。

次に、有志スピーチの中で、神戸製鋼所の外島健吉さんの門司時代（現在、北九州市門司区）神戸製鋼所門司工場（名称不詳、全市小森江）に居られて、近くにあった帝国麦酒（現在のサッポロビール九州工場）のサクラビールを愛飲され、その因縁で今も、サッポロビールを愛飲されているということをきいて、本当になつかしく感じました。

外島さんがおられたのは大正の一けた時代ではなかったでしょうか？実は私も大正五年から九年まで帝国麦酒に勤務しておりました。最初はボンサンとして入社、九年より十四年まで就学、十四年より正社員となりました。

例の米騒動の時のことを、今でもはっきり思い出します。何分、全地区には、帝国麦酒、神戸製鋼の外、鈴木系の会社が多く、（冶金、アルコール会社、製粉など）群集からねらわれていたので、警備のため、小倉から兵隊がきておりました。

隅田社長も猟銃を持ち込んで、会社に籠っておりました。大正七年七月のこと。私は鈴木本社から派遣されて来て居られた、竹村房吉さんと一緒に、門司港まで米屋襲撃を見物に出かけ（会社は小倉と門司の中間の大里にあった）帰りの電車も襲われて動かなくなり、歩いて二里余（八km余）帰りました。

今、文芸春秋刊、城山三郎著『鼠』を読み返して見て、鈴木の買占め問題が、故なきものなることを再認し、悪夢を想い起こしております。

新聞の曲筆、銀行のいじめ（帝国麦酒も受けました）も今更ながら、くやしくてなりません。感慨の余り、ペンが大分、興奮気味となりました。何卒ご容赦下さい。

皆様の益益の御健勝をお祈り致します。

追記＝帝国麦酒は桜麦酒と改称（鈴木解散後）昭和十八年十一月、大日本麦酒と合併、二四年九月、日本麦酒と朝日麦酒に分割、私は日本麦酒（現、サッポロビール）に残り、去る四〇年四月まで九州支店に勤務しておりました。

わが人生

坂本　寿

もし、あの時、ああいう判断を自ら下さなかったとしたら？もしあの時代に、あの人物に出会っていなかったら？……

近ごろ独りになると、『もし』という仮定の言葉で、自分の歩いて来た足跡を振り返ってみることが多くなった。ちょうど、子供がおもちゃをもて遊ぶような調子で、ふと、そう考えるのである。

今さら、なにを、と思われるかもしれない。どう考えてみたところで、人生の歩いてきた背景に、道を二本も三本もつけるというのは不可能なことなのだから。しかし、それでもなお、ぼくは、これまでとは違う人生を想像してみたりする。

いくら考えたって、違った人生なんて想像がつくはずがない。が、この八十四年間を顧みると、どうしても運命の不思議さを感じて、そう思わずにはいられないのである。

明治三十四年十一月、ぼくは土佐（高知県）の高岡郡中土佐町久礼で生れた。三方を山で囲まれた小さな漁港の町、久礼は、台風で知られた室戸岬と、足摺岬との、ほぼ中間に位置している。太平洋の潮騒をききながら育ったわけである。

学歴といえば、無いに等しい。高知商業しか出ていない。そのぼくが、よくもまぁ、人並な実業人になれたことだと思う。

今やわが社、日本発条株式会社は世界の三大メーカーの一つに数えられるようになった。

ぼくには、『日発』の中心柱を、〝土佐っぽコンビ〟と言われた藤岡清俊名誉会長と二人で築き上げた、という自負がある。昭和十四年創業時に資本金拾五万円、従業員五十人足らずの町工場だったこの会社が、四十数年の間に、資本金百拾億円、社員三千五百人の大企業に発展したことを思うと、実に感慨深い。

思えば、大正十一年、高知商業学校は卒業時に、ぼくを一流銀行へ推薦してくれた。一流銀行に無試験で入れる。銀行は、当時の商業学校の学生にとっては、またとない素晴しい就職先であり、名誉なことでもあった。

『先生、わがままを言うても、えいろうか。わし、銀行には行きとうない』

『え？何を言うんだ、坂本』

『わしが行きたい、と思うちょるのは、神戸の鈴木商店です』

『お前、バカだな。鈴木商店へ入るためには、試験があるぞ。あそこは、学校の推薦状が通用しないことを、知っちょるか』

『知っちょります』

『もし、その採用試験に落ちたら、どうするつもりだ。お前は、せっかく優等で卒業したのに、就職は一番最後にまわって、ざつとした（一番よくない）会社へ入ることになるんだぞ』

『わかっちょります。学校で推薦してくれた銀行は、そりゃあ一流だし、無試験で入れてもらえるのだから、こんなえい（よい）ことはありゃぁしません。けんど、あの銀行には学閥がありますろう。わしのような、商業学校しか出てない者は、いくら出世したところで、タカが知れちゅう』

『そうは言うてもな、坂本。銀行マンになったら、髪も七三に分けて、背広も着れる。月給は三十七円という高い金額やし、お前、父さんに仕送りもできるじゃないか』

『いや、先生。鈴木商店の月給は、最初九円やと聞いちょりますが、学閥がのうて、実力次第、成績さえよければ、外国へもやってもらえるそうです。わし、自分の力で仕事をしてみたい。外国へ行って、〝営業〟という仕事がしてみたいですきに』

『ふーむ。しかし……。では尋ねるが、お前、鈴木商店のことをどこで知ったのか』

『こんまい（小さい）時から、雑誌を取りよりましたきに、いつごろと聞かれても、はっきり分からんけど、わしの頭の中には、鈴木の名前がこびりついちゅうのです。〝実業家〟になりたいと思うたのも、鈴木のことを知ってからですきに』

『ジツギョウカ？坂本、お前はそんな言葉を、よう知っちょるのう』

鈴木商店の大統師である金子直吉という人は、土佐の吾川郡名野川村で生れた大先輩である。金子家はもとは高知城下の〝分限者〟